

2018 年 3 月に特任教員の武先生とともに天津師範大学 DD 正式 4 期生が帰国しました。教育学部での思い出を綴ってもらいました。

■ 三重大学での留学生活 ■

天津師範大学 DD 正式 4 期生 張 潼



時間が経つのは本当に早いです。三重大学での留学生活はもうすぐ終わります。日本へ来る前には、この一年間はとてもしつこい感じがしていました。しかし、日本に来てから、本格的な留学生活が始まり、知識をたくさん勉強したり、いろいろ

文化体験や観光活動をしたりして、この一年間も楽しかったが、残念ながら短かったように思いました。

来た日は去年の 3 月 31 日でした。にぎやかな中部国際空港に着いて、何も分からず期待を膨らませながら、日本に入国しました。最初の一週間は、日本での生活に慣れながら留学の準備をしました。入学式後、留学生活が本格的に始まりました。みんな指導先生のもとに、必修科目のほか、それぞれ専門分野に合わせて選択した履修科目や習いたい科目を頑張って学んできました。教育学部には、いろいろな専門分野が備わっていて、選択科目も多いです。先生からとても親切に指導をしていただきました。日本人学生もよく手伝ってくれましたし、友達がたくさんできました。春休みのとき、チューターと一緒になばなの里に行ってイルミネーションも見ました。本当に楽しかったです。天津師範大学と、授業時間や教育活動の仕方などがいろいろ異なりますが、一ヶ月ぐらい経つと、日本での生活も勉強もだいたい慣れてきました。そして、津市のあちこちを歩いてみたら、本当に静かで、



日本人学生と一緒になばなの里に行った

住みやすいところだと思います。

日本での観光も懐かしいです。休みの期間中、日本の風景をこの目で見て楽しみ、日本文化も体験しました。夏休みに、金閣寺や熱田神社など日本の寺社を巡り、日本の歴史や宗教が少しずつわかってきました。また、お祭りを体験し、日本の伝統的な服を着て、地元の人々と踊ったり、歌ったりして、とても楽しかったです。それから、茶道や着物の展示を見ることによって、本場の日本文化も体験しました。特に茶道を体験した時に、「一期一会」の考え方を理解でき、茶道は日本の宗教、芸術、哲学、社会、美学、礼儀、倫理などが融合され、総合的な文化であることも分かりました。



武先生と一緒に熱田神社に行きました

期末テストは試験やレポートなどが行われます。初めて日本の試験に出る私たちはとても緊張し、日本語力がまだまだなので、心配もありました。前期の試験に合格するために、みんな精一杯頑張った結果、試験もほとんど無事に合格し、楽しい夏休みを迎えることもできました。後期には、必修科目も多く、授業の内容も難しく、いろいろ大変で、とうとうストレスがたまって、一時落ち込んでいました。その時に、指導教員やチューターが親切に質問などに答えてくれたり、いろいろ役に立つ勉強方法を教えてくれたりして、そのおかげで後期の授業もうまく乗り切ることができました。もうすぐ留学生活を終え、帰国しますが、この一年間を振り返ると、日常の勉強と、試験やレポートの準備で明け暮れた日々も懐かしくなってきました。

日本で「ゼミ」という授業形式を体験しました。ゼミで、自分の研究テーマを決めて発表して、みんなの質問に答えたり、意見を聞いたりしました。最後に先生のコメントによって自分の研究内容を修正します。このようなゼミ活動による先生やみんなのコメントやアドバイスによって、研究中の難点も早く解決することができ、自主的学習意識も強くなり、研究能力も伸びました。先生やゼミのみなさんとの交流などのによって、本当に勉強になりました。

この一年間の留学生活で、大学祭や茶道などの異文化を体験しながら、専門知識などさまざまな知識を学ぶことによって、学力もずいぶん伸びてきたと思います。また、いろいろ自分の欠点などを見つけ、異なる立場で人や物事を理解する意識も大いに出てきました。特に一身田小学校での教育実習によって、教師の役割を深く理解して、「教える」ことは対象者のニーズとレディニーズに基づいて行わないといけないと深く理解しました。

こうして、海外での一年間の留学によって、語学力の進歩や異文化理解はもとより、視野が広がり、知識と能力への認識も深くなりました。これからも、いままで養ってきた自立性によって、自分の不足しているところを直し、日本語、日本文化、さらに研究分野の知識を頑張って勉強したいと思います。この一年間、三重大学教育学部の先生方や日本人の友達たちにお世話になりました。帰国直前に、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

他大学に先駆けて遠隔授業を始められた早瀬先生に、20年目の節目となる今年、この間の活動を振り返ってもらいました。

遠隔授業 20年を振り返って

英語教育講座 特任教授 早瀬光秋

1998年度(平成10年度)、三重大学は海外との遠隔授業を日本の多くの大学に先駆けて開始した。当時の「DCs 地域情報化推進センター」に加入し、同時に「三重県コミュニティ推進協議会」とも連携して、三重大学における遠隔授業が始まった。
(*藤原, 2001, p. 258)



1999年UNCWとの遠隔授業

実際には1998年度(平成10年度)後期、10月から翌年の2月にかけて5回、米国のノースカロライナ大学ウilmington校(UNCW, University of North Carolina at Wilmington)の日本語クラスと私の担当授業とがタイアップし、アメリカ映画「Parenthood」及び日本映画「家族ゲーム」をそれぞれ日英語で見た後、教育、家族、慣習などについて英語で討論した。

(Ozanich, Hayase, & Kano, 1999, p. 35) 目的は日米文化理解と口頭討論技術を含む英語能力向上である。当時インターネットは開始されていたものの、インターネット利用での遠隔授業はできず、ISDN回線を3つ借り切って行われた。1つのISDN回線は双方向なので結果的に日米双方で6人ずつが授業時間の90分国際電話をしていることになり高額であった。また、その後のPolycomの利用では画像や音声の中断はほぼ皆無であるが、当時はそうではなく、そのような中断がしばしばあり、音声か画像だけになった時は、映画ジェスチャーゲームと称して、日米の有名な映画をジェスチャーで示し、回答を文字で書いて示しあったりした。

1999年度はUNCWと英語科の5回の遠隔授業に加え、多地点接続によるテレビ会議システムを使い、三重大学、三重県立看護大学、岩手県立大学の学生が同時にUNCWの看護学の講義を聞いた。また、三重大学からは「稲作のテトラレンマへの貢献」と「芭蕉の俳句」の講義をUNCW生に行った。(藤原, 2001, pp. 262-263)

UNCWと英語科の遠隔授業は、荒尾浩子先生を加え毎年4~5回の割合で2005年度ごろまで継続して行い、しばらく中断の後2010年からは年に1回ビデオカンファレンス(授業の一

環ではないが、お互いにテーマを決め、プレゼンテーションと質疑応答を行うもの)を行い、現在に至っている。また2005年からはミシガン大学の日本語学習生と英語科生のビデオカンファレンスが年に4~5回、現在まで行われている。さらに、スペインのジャウメ・プリメル大学の英語科生と(三重大学教育学部)英語科生のビデオカンファレンスが2013年度に開始され、現在まで年に3回行われてきている。こちらは双方とも第二言語として学んでいる英語を使っているビデオカンファレンスであることが特徴的である。

また使用設備に関しては、最初は上述のように電話回線を用いて行った。その後2005年ごろからPolycomを用いて行い、2017年度後半からはPanasonic HDcom KX-1600Jという新機種を使用しているが、接続方法も簡略化され確実さも増した。また、音声・画像とも大変安定しクリアである。

2018年度もこれまで通り、UNCW、ミシガン大学、ジャウメ・プリメル大学との遠隔授業、ビデオカンファレンスを継続していきたい。



2014年ジャウメプリメル大学とのVC

(注)

*藤原和好氏：当時の三重大学学長補佐・遠隔事業室長

引用文献

藤原和好. 2001. 「三重大学: デジタルコミュニティズ(DCS)構想と遠隔授業」バーチャル・ユニバーシティ発起人坂本昂他監修『バーチャル・ユニバーシティ: IT革命が日本の大学を変える』株式会社アルク, pp. 257-268.

Ozanich, J. R., Hayase, M., & Kano, Y. 1999. 「One Class in Two Countries--Virtual University Project--」三重大学共通教育機構 大学教育研究--三重大学授業研究交流誌--7, 33-61.

学生海外留学報告

教育学部では積極的に海外留学に挑戦する学生が増えてきています。昨年度、海外留学を経験した4人の学生に寄稿してもらいました。

学びの多かったバンクーバー生活

日本語教育コース4年 中川美智子(66期生)

私は3年生の3月から約10か月間、カナダのバンクーバーに語学研修という形で私費留学しました。最初の5か月は語学学校に通い、残りの時間はカレッジに通いながら、空いた時間を見

つけては日本語教室でボランティアに参加するという生活を送っていました。

今回、カナダを留学先に選んで良かったと感じるのは、多文化

共生社会を体感できたことです。街に出れば、国籍や文化、宗教、言葉の異なる人で溢れており、みんながお互いの違いを受け入れ、尊重する文化がありました。私がお世話になった2つのホストファミリーもインド系の父を持つ家庭と、フィリピンからの移民の家庭で、毎日英語に加えてヒンディー語やタガログ語を耳にしていました。移民で発展してきた国だからこそ、日本には感じられないことや疑問にも思わないようなことが日常に溢れていて、周りの環境に対する興味や関心を広げる上では大きな意味を持っていたのではないかと思います。

また、留学中には日本では見られないことやできないことを沢山経験しました。中でも私が感動したのは数々のパレードです。7月の建国記念パレードでは、各国のチームがマーチングやダンスをしながら街道を練り歩くのですが、私も日本チームとして浴衣を着て参加しました。沿道に何千人もの観客がいた中で、出演者としてパレードを盛り上げることができたのは貴重な経験で、どこか誇らしさを感じられました。その時の楽しさや街の盛り上がりは今でも覚えています。8月にはプライドパレードという、性的少数者のためのパレードがありました。純粋に見ていて楽しかったのはもちろんですが、日本ではまだまだ性的少数者に対する理解が進んでいない中で、パレードという



カレッジの卒業式：左から二人目が中川さん



建国記念パレード：中川さんは一番左

形で性的少数者が輝ける場所を作ろうという環境に強く感動しました。自分の中の概念が一つ変わったような気がしました。

海外留学の良い点は、語学や専門技術などの知識を得るだけではなく、日々の経験や日本にはないことから学ぶ機会が多いことだと思います。たった1年近く海外に住んだだけで、自分の性格や価値観が根本から完全に変わったとは言えませんが、日本を離れてみたことで新しい考え方に触れて、視野が広がりました。また、今まで知らなかった自分の性格や自分が本当に好きなことを理解することができたのは、今後の就職活動にも活かせると思います。今回の留学を一つの思い出として終わらせるのではなく、これからの学生生活とその後の社会人としての人生に活かしたいと思います。

■ イギリスで学んだ人の多様性 ■

特別支援教育コース4年 坂中愛実(66期生)

世界には様々な考え方や生き方があることを肌で感じたことはありますか。私は4か月間のイギリスへの留学を通してこのことを学びました。私は特別支援教育コースに所属しており、LGBTに関する研究を行っています。LGBTとはレズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーというそれぞれの英単語の頭文字からできている多様な性の在り方を表す言葉です。LGBTの人々は、日本ではまだマイノリティとして捉えられていることが残念ながら現状です。この現状をどうしたら変えることができるかを研究するためにLGBTに対する考え方や制度が発展しているイギリスへ留学しました。



クラスメイトと共に：前列右から二人目が坂中さん

イギリスでは現地の大学附属の語学学校に通いながら、研究や調査を行いました。語学学校では中国人やサウジアラビア人のクラスメイトと共にネイティブスピーカーの先生のもとで生きた英語を学びました。授業ではリスニング、リーディングの授業もありましたが、先生方は、学生が他の国籍の学生同士で会話する機会を多く設けるように意識した授業をしてくださいました。そのおかげもあり、授業外でクラスメイトと話すことも多くありました。また、私は大学内の寮に住んでいたため、そこでも他の国の学生と友達になり、様々な話をすることができました。このようにイギリス人以外の友達も多くでき、多様な人々の考え方を知ることができました。LGBTに関しては国によっては大変寛容な国もある一方で、批判的な考え方を持つ国もありました。もちろん、個人によって考え方は様々ではありますが、日本

には知ることができなかった考えや生き方を知ることができました。

イギリスでは英語そのものを学ぶことと、自分の関心のある研究をすることを目的としていましたが、それ以外にも多くの楽しく、素晴らしい経験をしました。語学学校の授業は基本的には午前中のみであったため、午後は現地の友達と買い物に行ったり、ご飯を食べに行ったりして、楽しい時間を過ごしました。また、ハロウィンやクリスマスは日本よりも盛大で、その時期になると町中がそれらの行事一色に染まっていました。日本にはないイギリス独自の行事も経験することができ、目まぐるしくも充実した日々を送ることができました。

留学生活は自分次第で充実したものになるかそうでないかが決まります。授業だけに出席して、後の時間は自分一人で勉強するというのも留学の一つのスタイルだと思います。しかし、本当に英語を学びたいのであれば、とにかく外に出て生きた英語に触れることが重要だと感じました。自分の伝えたいことを英語で上手く伝えることができず、辛いと感じることも多々ありました。しかし、苦戦しながらも英語を話そうと頑張ることで自分が使うことのできる表現や単語が増えていくことを、身をもって感じました。4か月という短い期間ではありましたが、英語の勉強やLGBTの研究だけでなく、日本ではできない多くの経験をすることができました。私の人生に大きな影響を与え、今後の力となってくれる留学生活でした。



クラスメイトとの楽しい話し合い

■ ニュージーランドへの留学 ■

英語教育コース4年 井川太郎(66期生)

留学には、相当の覚悟が必要だと感じました。強い覚悟は、大きな1歩を踏み出すときに力になります。オークランドまでのフライト10時間半でいろいろなことを考えました。半年以上帰れない日本のことを考えると寂しい気持ちもありました。しかし、これから始まる冒険の方が、ワクワク感が強かったです。何でもやってやろうという覚悟を胸に、何があっても妥協しないという、それだけの覚悟を持っていました。

私は2017年4月から12月までニュージーランドへ留学しました。ニュージーランドで最も大きい都市であるオークランドという街で9ヵ月間、英語やニュージーランドの文化について学びました。オークランドに行くのは2回目だったのですが、初めて訪れたのは2年生のときの教育学部の研修でした。そのときに、オークランドの街並みや街自体が多国国籍化していることに気づき、現地では、より多くの国の人と関わること、地域ごとの英語の発音の差を発見できると思い、オークランドを留学先を選びました。また、ニュージーランドでは、ワーキングホリデービザなしで、アルバイトができることもオークランドを選んだ理由の1つです。

語学学校に通いながら基礎語学や現地の文化を学びました。また、語学学校の休暇中には、現地ですぐにできた友達とオーストラリアやニュージーランド国内を旅行しました。放課後や休日には、公園でバスケットボールやサッカーを楽しんだり、お互いの国の言語を教え合うこともあり、様々な国の文化やあいさつ程度の会話を学ぶ機会にもなりました。

語学学校や実際の生活のなかで感じたことは、街を歩いてい



るといろいろな訛りの英語が聞こえ、時には英語とスペイン語、英語とヒンディー語が会話中に混在していました。そのような会話は、日本ではあまり聞けないでしょう。留学後半では、自分の英語力をもっと上げたいと思い、上級のクラスで英語を学びました。そこには、ほとんどヨーロッパの人しかいなくて、彼らの英語運用能力の高さを知ると同時に、彼らは日本を含むアジア全体のことに興味を持っていることを知りました。しかし、いざ日本のことを質問されてもうまく答えられない自分がいて、私自身の自国に対する知識の無さを感じました。外国の同世代の人たちは自分よりも見聞がとて広いことを知りました。上級のクラスに上がったからは、周りの友達のレベルも高く、日々刺激を受け、自ら積極的に行動しようと心がけました。

この9ヶ月間の覚悟を持って臨んだ貴重な体験を通して、国籍を問わずたくさんの人と出会いました。留学に挑戦してみようと思わなかったら決して出会わなかった人たちです。そんな人たちが身近になっていくのは不思議な感覚でもおもしろくもありました。人に恵まれたからとても充実した時間を過ごすことができました。

■ アメリカで学んだ新しい可能性 ■

英語教育コース4年 日下部亮(66期生)

自分自身の可能性を広げたい、留学に行こうと思ったのは大学に入学した時でした。私は2017年4月から12月半ばまでの約9ヶ月間、アメリカのカリフォルニア州にあるカリフォルニア大学アーバイン校に留学をしていました。その大学を選んだ一つの理由としては別の学問を英語で学べるということがありました。語学学校へは今回の留学以前に数週間ですが参加したことがありました。文法に重点を置くために会話がおろそかになりがちな日本の文化と違い、海外は会話から導入するために普通の授業では文法に重きを置いて学びました。そのギャップを感じた私は日本でもできる文法を学ぶのではなく、「英語で別の学問を学びたい」という一心でこの学校を志願しました。

入学のために、小論文や普通の学校の成績も必要になるこの学校を早めに視野に入れることで大学生生活の目標がより充実し



卒業式スピーチにて

たものになりました。経営学マーケティング学を学ぶことになった私は、教育学しか学んでこなかった自身の見聞の狭さを思い知りました。また、アジアやヨーロッパなど様々な国の方と共に授業を受ける中で文化や考え方の違いを直に触れることができました。学問としての経営学はもちろんのこと、実際のビジネスマンの方にも教えていただき、現在の経営学とはどういうものかを学びました。グループワークも多く、課題もたくさんでしたが、新しいことを吸収しながら進めていくことはとても楽しかったです。

また、学校生活のみならず日常生活も積極的に活動していききました。アプリを活用し、日本語を学びたい海外学生の人とアクティビティを行いました。また、行きつけの日本料理店の方に招待していただき、海外の人に日本料理を販売するボランティアにも参加させていただきました。休みの日も無駄にせずたくさんの人とコミュニケーションをとることを恐れずに行動したことととても多くの経験ができました。

6ヶ月間の講義が終わった後は3ヶ月間の長期インターンシップを行いました。これは学校のプログラムで自動的に参加させていただけのものではなく、自らで自己推薦文を提出し、面接を行なって実際の会社から採用していただくというものです。数社受けさせていただき実際に採用していただいた時はとても嬉しかったです。内容も学生としてではなく一社会人として扱っていただいたため、資本主の方にプレゼンを行なって交渉したりなど、実際の場にも参加させていただけることが多くありました。学んだ知識や経験をすぐさま活かすことができたのはかけがえのない経験だと思います。

今回の留学を通して感じたことは、道は一つではないということです。新たな学問に学び、新たな人に会い、新たな可能性を模索していただくだけで私の人生は何百通りと増えていくことを感じました。大事なことは挑戦しようと思う一歩だけです。一歩進んでしまえば、自分では想像もつかなかったような新たなことがたくさん舞い込んできますよ。